

基金ホームページURL ● <http://www.jkcf.or.jp>

発行 財団法人 日韓文化交流基金
〒105-0001 東京都港区虎ノ門5丁目12番1号
虎ノ門ワイコービル3F
電話 03-5472-4323 FAX 03-5472-4326
発行日 2008年3月31日

第7回日韓歴史家会議「反乱か？ 革命か？」

2007年11月16～18日の3日間、ソウル・ホテルロッテで第7回日韓歴史家会議が開催されました。

今年で7回目となった本会議は、日韓両国の歴史研究者間の学問的な「交流の場」として、2001年に発足しました。両国の幅広い分野の歴史研究者が、毎年1度集まり、歴史学の新しい研究動向について意見を交換し、会議を重ねるごとに議論を深めています。

16日には開催記念講演会「歴史家の誕生」が開催され、金容燮韓国学術院会員による「農業史に進路を決めるまで」と、和田春樹東京大学名誉教授による「ロシア、朝鮮、そして日本」の二つの講演では、自らの生い立ちや、歴史学者を志した理由、生涯の研究テーマを選び取ることになった経緯が、



今回の会議には40名を超える両国の歴史研究者が参加した



東アジア三国の「反乱」と「革命」について、最新の研究成果に基づき、2日間にわたって討論が行われた

当時の社会状況と関連づけながら生き生きと語られました。

17日からの会議では、「反乱か？ 革命か？」を主題に、両国の日本史、韓国史、中国史の専門家による最新の研究を土台にした報告と討論が行われました。第1セッションと第2セッションでは、近代史と中世史における日韓の事例（東学革命／東学農民戦争－明治維新、士林政治－鎌倉幕府）が対照的に紹介され、第3セッションでは中国近現代史の事例（太平天国、辛亥革

命、共産革命等）を軸に、ある歴史事象が「反乱」と「革命」と相反する名で呼ばれるという、歴史解釈における両義性をめぐって、議論が展開されました。

18日の第4セッションの総合討論においては、前日の各セッションの討論の内容を踏まえてそれらを相互に関連づけつつ、比較の対象を他の地域の事例に求めながら、さらに議論を深めました。



日程

11/16(金) **開催記念講演会「歴史家の誕生」**
 金容燮(学術院)「農業史に進路を決めるまで」
 和田春樹(東京大名誉教授)「ロシア、朝鮮、そして日本」



金容燮氏



和田春樹氏

11/17(土) **主題：「反乱か？ 革命か？」**

1. 東学革命と明治維新
 司会：柳永益(延世大碩座教授)
 韓国側報告：許東賢(慶熙大)
 「1894年農民蜂起に関連した衝突する歴史記憶に対する管見」
 討論：趙景達(千葉大)
 日本側報告：宮地正人(東京大名誉教授)
 「明治維新の変革性」
 討論：金光玉(釜山大)
 全体討論

2. 文人政権と武臣政権
 司会：閔賢九(高麗大)
 日本側報告：閔幸彦(鶴見大)
 「『武威』と『征夷』—東国王権の可能性を探る—」
 討論：南基鶴(翰林大)
 韓国側報告：鄭萬祚(国民大)
 「朝鮮時代の士林政治—文人政権の一類型—」
 討論：笠谷和比古(国際日本文化研究センター)
 全体討論

3. 中国での反乱と革命
 司会：曹秉漢(西江大)
 韓国側報告：裴京漢(新羅大)
 「近現代中国の反乱と革命」
 討論：高橋均(東京大)
 日本側報告：溝口雄三(東京大名誉教授)
 「反乱なき革命—辛亥革命の実相—」
 討論：金衡鍾(ソウル大)
 全体討論

11/18(日) 4. 総合討論
 司会：金榮漢(西江大)

参加者

日本側(敬称略、50音順)

板垣雄三(東京大名誉教授、イスラム史)
 笠谷和比古(国際日本文化研究センター、日本近世史)
 糟谷憲一(一橋大、朝鮮近世・近代史)
 木畑洋一(東京大、英国現代史)、久保亨(信州大、東洋近代史)
 近藤成一(東京大、日本中世史)、関幸彦(鶴見大、日本中世史)
 高橋均(東京大、ラテンアメリカ近現代史)
 趙景達(千葉大、朝鮮近代史)
 濱下武志(龍谷大、アジア近代史)
 溝口雄三(東京大名誉教授、中国思想史)
 宮嶋博史(成均館大、朝鮮史)
 宮地正人(東京大名誉教授、日本史)
 和田春樹(東京大名誉教授、ロシア・ソ連史・現代朝鮮研究)

韓国側(敬称略、가나다順)

高惠玲(国史編纂委員会、韓国史)、金光玉(釜山大、日本史)
 金基鳳(京畿大、西洋史)、金榮漢(西江大、西洋近代史)
 金容燮(東北亜歴史財団、日本史)
 金容燮(学術院、韓国近代史)、南基鶴(翰林大、日本史)
 閔賢九(高麗大、韓国中世史)、朴元燾(高麗大、中国史)
 裴京漢(新羅大、中国史)、白永瑞(延世大、中国史)
 白仁鎬(西江大、西洋史)、安輝濬(明知大、美術史)
 延敏洙(東北亜歴史財団、日本史)、呉星(世宗大、韓国近代史)
 柳永益(延世大、韓国現代史)、李基東(東国大、韓国古代史)
 李宇泰(ソウル市立大、韓国古代史)
 李章雨(韓国教会史研究所、韓国中世史)
 李泰鎮(ソウル大、韓国近代史)、林志弦(漢陽大、西洋近代史)
 鄭杜熙(西江大、韓国近代史)、鄭萬祚(国民大、韓国近代史)
 鄭永順(韓国学中央研究院、歴史教育)
 曹秉漢(西江大、中国史)、趙承來(清州大、西洋史)
 車河淳(西江大名誉教授、思想史)
 崔起榮(韓国教会史研究所、韓国近代史)
 韓哲昊(東国大、韓国近代史)、咸東珠(梨花女子大、日本史)
 許東賢(慶熙大、韓国近代史)



第7回日韓歴史家会議報告書「反乱か？ 革命か？」

2008年3月刊行、180ページ

内容：講演、報告、討論、討論に対する報告者のコメント、総合討論

選挙に見る韓国の「民心」と新大統領

静岡県立大学国際関係学部 教授 小針 進

「大統領こそが国家経営を左右し、『選出された皇帝』なのである。韓国では大統領の座が『大権』と呼ばれるのだ。それだけに、大権争いは、命がけで必死の泥沼戦になる」

これは最近出版された『韓国歴代大統領とリーダーシップ』（金浩鎮著、小針進・羅京洙訳、つげ書房新社刊）のくだりである。筆者も訳者のひとりになっていて矛盾するかもしれないが、韓国の大統領選はそんなにドロドロした複雑なものなのだろうか。

「お祭騒ぎ」の遊説

民主化以降の韓国での大統領選はシンプルだ。ややこしい米大統領選とは異なる。長丁場の「予備選」はなく、「本選」で有権者が「大統領選挙人」へ投票する方式でもない。秋口までに各党は任意の方式で「予備選」を行って候補者を選出する。「本選」は11月下旬から23日間の正式な選挙運動を経て、12月中旬の投票日（2004年に改正された公職選挙法で「任期満了日前70日以後、最初の水曜日」と規定）に一般有権者が支持する候補者へ直接投票する仕組みだ。

このわかりやすさは韓国人の気質にマッチしているだろうし、選挙戦への国民的な関心を呼びやすくしていると思う。また、支持者が風船やプラカー



大統領候補の遊説車の前で踊る若者の運動員（ソウル市内、2007年12月筆者撮影）

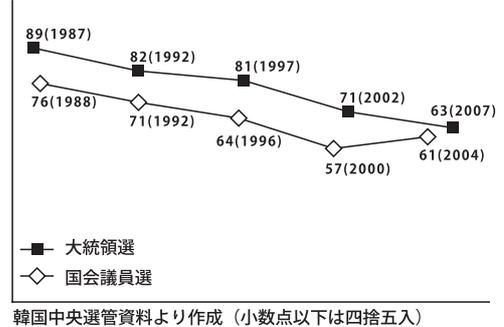
ドを手にする米大統領選もそうなのだろうが、「お祭騒ぎ」のような高揚感が韓国の大統領選でも感じられる。筆者は、1987年に直選制が復活して以降、すべての大統領選の様を現地で直接目にする機会があった。もはや地域感情などによる石や卵や火炎瓶の投げつけは見られないものの、「お祭騒ぎ」の度合いは増しているような気がする。

李明博新大統領が当選した昨年末の選挙戦もそうだった。厳冬の夕方、ソウル市内の遊説を取材したが、流行歌の替え歌がスピーカーからガンガン流れ、若い運動員が激しくダンスを繰り返す光景を見た。候補者本人や支持者の演説が、歌と踊りの合間にあるといったムードで、その演説内容も政策そのものはあまり語られなかった。複数の候補の遊説を見たが、どれも同じようなものだ。遊説はけっして「命がけで必死の泥沼戦」ではない。

民主化と裏腹に下落する投票率

「お祭騒ぎ」といっても、昨年末の大統領選が盛り上がったとは言い難かった。なんとなくしらけていた。投票率も63.0%と過去最低であった。「李明博当選」が早くから確視されてきたことも一因だろう。ただ今回に限らず、グラフのように韓国では各種選挙の投票率がほぼ下落し続けている。「郵政解散」による衆院選（2005年9月）の投票率は67.5%（小選挙区）であったから、もはや日本の総選挙のほうが高いぐらいの低投票率なのである。ある韓国の著名な政治学者は、所得格差

韓国の大統領選と国会議員選の投票率の推移
（%、カッコ内は年）



の「両極化」とともに、低投票率を「民主化以降の韓国民主主義の危機」と言っている。ただ、大多数の国民が飽食状態とっていいほど豊かになり、大統領の悪口をいくら言っても構わないほど自由な民主社会になったのだから、政治的無関心層が増えるのは当然と言えば当然だ。

韓国では国民の声を「民心」と呼ぶが、「民心」はうつろいやすい。当選後、李明博新大統領は英語教育の強化を方針として打ち出したが、期待していた「歓迎」の声よりも、「英語ができない者に国家が失格者の烙印を押すのか」という反発の声が思いのほか多く、政権発足直前にソウルで聞いた。こうした「民心」を読むのは難しく、それが次の選挙結果となって現れるのだ。新大統領は、どうやって「民心」を引きつける政権運営を行うのだろうか。また日韓文化交流にも関心を寄せてくれるだろうか。期待しながら注目したい。

PROFILE

こはり すずむ

1963年生まれ。東京外語大卒、ソウル大行政大学院博士課程中退。特殊法人国際観光振興会職員、外務省専門調査員（駐韓大使館）等を経て現職。著書に『韓国と韓国人』（平凡社）、『韓国人は、こう考えている』（新潮新書）などがある。

2008年度助成対象事業

2008年度助成対象事業には96件の申請があり、この中から44件への助成が決定しました。

青少年・草の根交流（日韓共同未来プロジェクト） 26件

事業名	申請団体	実施時期	場 所
市民祭りチーム 朝鮮通信使パレード参加事業	NPO法人 翔青会（しょうせいかい）	5.2 - 5.6	釜山・龍頭山公園、光復路一円
東アジア国際学生フォーラム—Linking East Asian Future— LEAFフォーラム2008 日本セッション	LEAF日本実行委員会	5.13 - 5.17	国立オリンピック記念 青少年総合センターほか
日韓両国の大学生による演劇 「地図マニア・扉の彼方に」の共同制作	特定非営利活動法人 沖縄県芸術文化振興協会	7.14 - 7.20	沖縄・ていしらじ劇場、 沖縄市民会館
BATI-HOLIC（バチ・ホリック）と共に作り上げよう！日韓共同制作、青少年草の根音楽公演	BATI-HOLIC（バチ・ホリック）	7.19 - 7.22	在大韓民国日本国大使館公報文化院、 漢陽女子大学ほか
釜山高校生との美術文化交流	釜山高校生との美術文化交流 実行委員会	7.20 - 8.12	釜山
Global Junior School 2008	社団法人 岩国青年会議所	7.25 - 7.28	蔚山
水のかげ橋 日韓子ども交流事業	NPO法人 蒲生野考現倶楽部	7.25 - 7.31	滋賀・琵琶湖、京畿・城南
名護屋小学校 萬徳初等学校ホームステイ交流事業	名護屋小学校PTA	7.28 - 8.1	全南・萬徳初等学校
第4回 広島・韓国青少年囲碁交流	広島県日韓親善協会	8.1 - 8.5	釜山
「韓国の友だち、アンニョンハセヨ！」 —小学生ホームステイ交流2008	特定非営利活動法人 多言語広場 CELULAS（セルラス）	8.1 - 8.7	馬山・虎溪初等学校
韓日環境を生かしたまちづくり青少年市民交流事業	特定非営利活動法人 グラウンドワーク三島	8.2 - 10.14	仁川・江華、静岡・三島
第23回日韓学生会議 東京大会	日韓学生会議	8.4 - 8.18	八王子、渋谷ほか
第14回山口・公州ジュニア交流隊	社団法人 山口青年会議所	8.7 - 8.10	忠南・公州
日韓共同ゼミ2008	特定非営利活動法人 劇研	8.7 - 8.12	京都・アトリエ劇研、 京都芸術センターほか
第6回学生のための国際ビジネスコンテスト OVAL Seoul-Tokyo 2008	第6回学生のための国際ビジネスコン テストOVAL Seoul-Tokyo 2008	8.9 - 8.14	国立オリンピック記念青少年総合セ ンター、ソウル・女性プラザ
21世紀のこども通信使事業2008	21世紀の日韓こども通信使 実行委員会	8.18 - 8.25	大阪、神戸、京都ほか
東アジア学生フォーラム・日韓一学生の対話・共感 による相互理解と未来に向けた行動（アクション）	特定非営利活動法人 C°SEA朋（TOMO）	8.20 - 8.26	ソウル、済州
「近代移行期における東アジアの民衆のあり方を比較し、連関を 考えるための国際的ネットワーク」構築のためのワークショップ	アジア民衆史研究会	8.22 - 8.25	ソウル・歴史問題研究所
韓国の子どもたちとハングルを使って、 日韓伝統文化の体験交流をしよう。	立石小学校 韓国友の会	8.26 - 8.28	釜山・東周初等学校
第45期 日韓学生交流プログラム	日韓学生交流	8月	韓国
横浜・仁川 都市間交流事業	財団法人 横浜市国際交流協会	9.4 - 9.8	横浜
日韓・総踊りで大交流（日韓交流おまつり）	はなこりあ	9.25 - 9.29	ソウルほか

事業名	申請団体	実施時期	場 所
「日韓交流おまつり2008 in Seoul」参加交流事業	青森空港国際化促進協議会	9.27 - 9.28	ソウル・市庁前広場ほか
日韓交流おまつり2008参加交流事業	おはら祭振興会	9.27 - 9.28	ソウル・市庁前広場ほか
日韓次世代による 「Oita~Busan映像スタディ交流2008」	大分県立芸術文化短期大学	11.16 - 11.25	大分県立 別府コンベンションセンターほか
第3回大韓民国済州道民謡と日本沖縄民謡比較 研修・講義及び・両国伝統芸能交流会	天のソリ・地のソリ	2009.2.2 - 2.9	沖縄・那覇、南城

シンポジウム・国際会議 10件

事業名	申請団体	実施時期	場 所
加藤清正と松雲大師~徳川家康 平和への道	熊本・韓国蔚山文化・ スポーツ交流会	5.10 - 5.11	熊本市役所、 熊本市立西山中学校体育館ほか
『マスメディアを通じる日韓相互イメージ調査 結果報告』のためのシンポジウム	ICFP-JAPAN (国際コミュニケーション・ フロー研究・日本プロジェクト)	5.16 - 5.17	東京・NHK放送博物館 セミナールーム
韓国現代文学と日本 (韓国現代文学2008年第3次 学術大会一日韓両国の韓国近現代文学研究者交流)	韓国現代文学会	8.22 - 8.23	ソウル大学校
東アジアにおけるまちづくりの現代史を共有する 日韓共同ワークショップ	アジア諸国のまちづくり 共同研究会・日本チーム	10.9 - 10.11	ソウル市政開発研究院
第9回 日韓学生シンポジウム	東北大学多元物質科学研究所 水崎研究室	10.22 - 10.26	ソウル大学校
奈良県立橿原考古学研究所創立70周年記念 国際シンポジウム	奈良県立橿原考古学研究所 附属博物館	11.1 - 11.5	奈良県立橿原考古学研究所、 奈良県社会福祉総合センターほか
創設30周年記念 日中韓雅楽シンポジウム	瑞穂雅楽会	11.7	学習院創立百周年記念会館
河川の自然再生を軸とした都市の再生に関する 日韓欧交流国際シンポジウムの開催	財団法人 日本生態系協会	11.12	東京・津田ホール
東アジアドイツ史会議 (第二回)	東アジアドイツ史会議 第二回会議開催準備委員会	11.21 - 11.22	大阪国際会議場 (グランキューブ大阪)
日韓中共同映画製作シンポジウム	NPO法人 横浜アートプロジェクト	11.28 - 11.30	横浜市開港記念会館

芸術交流 8件

事業名	申請団体	実施時期	場 所
Noism08 「NINA—物質化する生贄」韓国公演	財団法人 新潟市芸術文化振興財団	4.22 - 4.27	ソウル・LGアートセンター
第10回韓日男声合唱演奏会	男声合唱団 東京リーダーターフェル1925	5.22 - 5.25	京畿・高陽
アートイン木町プロジェクト「つなぐ」'08	NPO法人 YICA・山口現代美術研究所	6.24 - 7.13	山口大学、山口旧市内ほか
第11回日韓交流 (対馬・釜山) 写真展	対馬日韓交流写真協会	8.1 - 8.4	長崎・対馬市交流センター
日韓交流いけばな発表会とワークショップ	錦舟会	8.6 - 8.7	在大韓民国日本国大使館公報文化院
日韓交流おまつり2008 in ソウル 参加事業	山形県国際観光推進協議会	9.27 - 9.28	ソウル・市庁前広場
音楽史劇「もう一つのシルクロード」	民俗工房	10.3 - 10.4	昭和女子大学人見記念講堂
済州ジャパンウィーク 街角コンサート	マイスター ブラス・カルテット	10.24 - 10.28	済州ジャパンウィーク会場

朝鮮通信使400年記念 九州国立博物館 国際シンポジウム 「アジアのなかの日朝関係史」

シンポジウム・オーガナイザー兼事務局 橋本 雄

民・博一体型の記念イベント

2007年は江戸時代の通信使が始まって400年に当たり、各地で多くの催し物が開かれたことは記憶に新しいでしょう。福岡県太宰府市の九州国立博物館（以下「九博」）でも、日朝関係に関わる文化財を特集陳列することにしました。そして、九博に勤めていた筆者が媒介となり、東京の朝鮮王朝実録講読会との共同主催・企画の形で、国際シンポジウムを開催しました（2007年12月15日（土）・16日（日））。近年成長著しい日朝関係史研究の最新成果を、できるだけ多くの市民に分かりやすくお伝えするのが使命です。

しかも、2007年は、朝鮮王朝実録講読会が30周年、今回共催に加わっていただいた韓日関係史学会（ソウル）が15周年、同じく世宗実録研究会（福岡）が10周年に当たります。賑やかなシンポジウムとなるわけです！九州で、これだけ多くの日朝（韓日）関係史研究者が集まったのはおそらく初めてのことでないでしょうか。

九博にとって、このように特集陳列と密接に連動するシンポジウムを開けたことは、非常に大きな慶びであり成果でした。日韓文化交流基金はもちろん、九州国立博物館振興財団等の支援もあって、民・博一体型の日韓文化交流を象徴する複合イベントが実現で



2日目：セッション2「あたらしい近世通信使研究」

きたということが出来ます。

シンポジウムの概要

シンポジウムの中味について、簡単に紹介しておきましょう。

1日目は、「日朝関係史研究のフロンティア」と題し、関德基・木村直也両氏の講演から始まりました。韓・日の学界における研究史の概要と課題を展望する内容です。次いで、個別報告・コメント各5本が続き、総括コメント2本を経て、総合討論で終幕しました。報告の主題は、「齋浦倭館の過去と現在」、「15世紀朝鮮の日本通交における大蔵経の回賜とその意味」、「日朝開戦前夜の対馬宗氏領国」、「秀吉の病気風聞と講和交渉」、「倭城をめぐる交流と葛藤」でした。いずれも新見満載で力作揃い、ヴァラエティに富んだ研究集会となったと思います。

2日目は、「前近代日朝関係の友好と摩擦」という総合テーマで、2つのセッション（座談会）を用意しました。一つは、「焼物にみる日朝関係史」。このセッションでは、文献史学研究者と考古学研究者とが異種混浴して、朝鮮前期日朝交易における陶磁器のあり方、九州の焼物のルーツ、中国・朝鮮と日本の焼物産業の比較などが論じられました。二つめは、「あたらしい近世通信使研究」。近世初期の対馬による国書偽造問題や、近世日本人の朝鮮観、絵画史料に見える通信使像などの最新の研究成果を、近世日朝関係史の中堅・若手研究者が論じました。「平和・友好」一辺倒の通信使像の刷新にも貢献できたのではないのでしょうか。

そして終了後、希望者を募って、九博職員ならびにシン



1日目：国際研究集会の総括コメント・総合討論風景

ポジストによる展示解説会が行われました。シンポジウムで扱われた歴史資料の数々を前に、お客様方も大変熱心に見入っておられました。

歴史の共同研究の意義

韓国の韓日関係史研究者の第一線で活躍する人々の多く（つまり今回の韓国側参加者）が、東京留学中に、朝鮮王朝実録講読会に参加した経験を持っています。「同じ釜の…」ではありませんが、日韓の研究者が、膝を交えて一つの史料を読み込んだ意義はとても大きいと思います。このシンポジウムを経て、さらにその思いを強くしました。そして、現在ほど、一つの歴史的事象を日韓の研究者がともに実証し、共有し合うことが必要な時代もないでしょう。本シンポジウムを一つのステップとして、今後の共同研究の継続と進展とを誓い合う日韓の研究者の姿がとても印象的でした。

PROFILE

はしもと ゆう



北海道大学大学院文学研究科准教授。朝鮮王朝実録講読会（東京、9年半在籍）および九州国立博物館（福岡、5年半在籍）のOB。今回の国際シンポジウム「アジアのなかの日朝関係史」の企画・準備に携わる。中世後期の日本と東アジアの国際交流史が専門。

相互理解ミッション

日本政府の「21世紀東アジア青少年大交流計画」の一環として、日韓文化交流基金が社団法人日本青年会議所に委託した「相互理解ミッション」が、2007年8月1日から7日にかけて6泊7日の日程で実施されました。

「相互理解ミッション」は、異なる歴史観や価値観を超越して、互いに相手を尊重し理解しあう相互理解を深めることで、さまざまな問題を解決に導く良きパートナーとしての意識を醸成させ、そこから生まれる新たな信頼関係によって、アジアはもとより世界平和と繁栄を実現させる第一歩となることを目指したものです。今回のプログラムには、日本50名、韓国54名、中国51名の総勢155名からなる3カ国の青年が参加しました。

1日目は、日韓、日中のグループに分かれ、3時間にわたる相互理解プログラムを実施しました。10名前後の小グループで議論し、価値観や歴史観の違いはありながらも、「相手の長所を知ることができた」や「相手に親しみを感じることができた」など、互いが

協力できるパートナーであることに気づききっかけとなりました。

並行して、安芸の宮島や、マツダミュージアム・工場、平和記念公園、原爆資料館などの見学を行いました。これらの見学は単なる世界遺産や史跡訪問に止まらず、日本の「ものづくり」に対する意識の高さと、環境に配慮した工場経営を実践する企業の姿や、核兵器の悲惨さを理解してもらうことがねらいでもあります。初日に全員で作った折り鶴を平和記念公園に奉納し、国境を越えて平和への思いを一つにしました。

4日目は、日中韓の3カ国の青年が一堂に会し、「平和フォーラム」を開催しました。参加者が率直に意見交換する中、さまざまな問題はあるにせよ、まずは互いをよく知ることから始め



参加者全員で作った折り鶴の奉納（平和記念公園）

て、より良い関係を築き、協力することで、それらの問題を乗り越えられることを実感しました。

また、ホームステイをアレンジし、広島県内の一般家庭で1泊しながら、日本の文化・風習や市民生活を肌で感じる貴重な経験をしました。

5日目以降は、大阪、京都を訪問し、小グループの自由見学を通して日本の特徴のある都市をより深く知る機会となりました。

相互理解ミッションを通じて

社団法人 日本青年会議所 主計高広

相互理解プログラムのようす



この度、近隣諸国との歴史観や価値観を乗り越えた相互理解の推進を目指して、「相互理解ミッション」を開催しました。

初日のウェルカムパーティーで初顔合わせした参加者は、緊張した面持ちでしたが、次第に緊張もほぐれ、お互いの国の紹介など笑顔の中で交流が弾みました。

相互理解プログラムでは、互いの価値観や歴史観の違いを確認した上で、互いの国の平和と繁栄を実現させるにはどうしたらいいのか、終始活発な議論が繰り広げられました。また、同時通訳システムを使用した3カ国同時の意見交換では、歴史認識問題や政治経済および平和について幅広く意見を交換しました。

日本経済の原点ともいべき大阪、そして日本の歴史と文化を代表する京都の訪問では、小グループに分かれ、通訳とともに自由に散策をしました。時間を一杯使って、自分の目線で日本を感じ、理解を深めてもらったと感じています。

短い期間ではありましたが、アンケ

ート調査でも、相互理解推進の手ごたえを感じる結果となり、関係者一同大変喜んでます。中でも「今回学んだことを周りの人に伝えたい」という参加者のコメントには感動しました。

相互理解の推進とは本当に難しい課題ではありますが、決して越えられないハードルではなく、私たち自身が周りを少しでも良くしようと思うことで推進できるものと、今回の事業を通じて確信することができました。



ホームステイ

私は、上高地や川奈など、1930年代の日本に多くの国際リゾート地開発をもたらした国際観光政策について研究していた。この政策は、欧州からロシアを經由して、満鉄、朝鮮鉄道、鉄道省までを連絡する1920年代の欧亜連絡運輸締結により、外国人が日本に大量に訪れることを期待して始まったのだが、ふと、その肝心なルートとなった朝鮮半島にも外国人が、しかも、遊びに訪れていたのか？ との素朴な疑問が生じた。外国人は日本統治下の「CHOSSEN」に何を期待して、どのように訪れていたのか。

世界旅行に組み込まれた「KEIJO」観光

下の写真を見てもらいたい。

1926年、金満国家アメリカの人々、400名を乗せた豪華客船フランコニア号が、世界旅行先の一つとして仁川に寄港した新聞記事である。彼らは、朝に下船し、特別列車で京城入り。景福宮などの史跡を訪れて、朝鮮ホテルで昼食。午後は引き続き、妓生の踊りを堪能したり、伝統工芸を見たりして、夕方には再び列車に乗って船に戻っ

た。こうした京城日帰り観光をする外国船の寄港は、当時、しばしば、みられた。

なぜ、彼らは京城に訪れたのか？ 明らかな理由をいくつか挙げたい。

一つは、当時流行した博覧会に飽きたこと。世界から寄せ集めた万物の「学習」だけではつまらない。金も余っていたので、直接、世界に旅立った。この時、日本、朝鮮半島、中国がその経路に組み込まれたわけである。

また一つは、1920年からアメリカで酒が禁止されたこと。酒好きには禁酒法施行は耐えられない。酒をシコタマ積んで国外に出て浴びるように飲み、ついでに京城に訪れた。

もう一つの理由は、船が優秀化したこと。船は当時、「移動するホテル」と呼ばれるほど、設備が良くなった。彼らにとって、異文化東洋の便所、風呂、就寝のスタイルは我慢ならなかったが、豪華客船はこの困難をなくしてくれた。船から日帰りできる場所なら、現地の宿泊施設に泊まることなく、しかも手ぶらで訪れることができるのである。仁川からは、京城。こうして「KEIJO」は、港から鉄道に乗って訪れることのできる「日帰り国際観光地」として「発見」される。

宣教師外人村

なにも朝鮮半島を目指したのは、豪華客船のアメリカ人だけではない。東アジアに住みついていた宣教師達も「避暑」に訪れた。当時、元山、大川、智異山など、軽井沢のような避暑地があった。各々、朝鮮半島在住の宣教師が自ら切り開いたものだが、なんと、上海などから英米人宣教師が、避暑のためにはるばる訪れていたという。1921年に開発が始まった智異山を例にとると、1500m程の山頂のような場所に、別荘50戸に、テニスコート、プール、ゴルフ場まであった。筆者も現地を訪れてみたが、港からも遠く、自動車道もない細い山道を、いったいどうやって登ったのか不思議で仕方ない。彼らは、宣教師の噂を通じて「去年は軽井沢、今年は智異山」と、東アジアを股にかけて避暑を楽しんでいた。

国際リゾート地としての金剛山

ここまでは船で訪れた人々だった。鉄道の国際的な利便性の向上は、鉄道を利用した外国人の往来も期待させた。鉄道事業者は、観光地、リゾート地の開発に着手する。

金剛山は近世より名は知られていたが、訪れたことのある者はほとんどいなかった。近代的な開発は朝鮮総督府鉄道局による道路改修とホテル開設により始まる。鉄道局をはじめ、1917年から1925年までその鉄道を委託経営した南満洲鉄道株式会社も、仁川、元山など朝鮮半島全土で開発を手がけるが、この金剛山だけは20世紀前半を通じて、絶えず観光開発の対象となった。



アメリカ人400名を乗せたフランコニア号の寄港

中でも注目すべきは、1928年、鉄道局による貸別荘5棟の建設だ。滞在する外国人達の記念写真に写り込んでいるのが、その貸別荘である。ここの滞行者も上海や香港からやって来た欧米人だった。当時、中国莫干山、青島、大連、雲仙、軽井沢など、東アジアの避暑地は、上海、香港、マニラからの避暑客争奪戦を繰り広げていたという。鉄道局は金剛山をもって、この戦いに参戦したのである。貸別荘の建設には、1927年の欧亜国際連絡運輸締結も少なからず影響したであろう。

一方で、京城方面から金剛山に向け電車軌道の建設も進み、1931年には内金剛まで開通した。すると、1926年に900名弱だった来訪者は、25,000名まで急増した。外国人に開かれただけでなく、大衆化もしていたことを物語っている。その立役者、金剛山電気鉄道の社長、久米民之助の立てた計画は壮大だった。

金剛の名勝を世界的な楽園に 野球場、競馬場、ゴルフリンク、プール、スキー場の新設備 金剛山電鉄が五ヵ年の大計画

これほどの大がかりな計画は、当時

の内地にも多くはない。合い言葉は「ダイヤモンドマウンテン」。つまり、世界に名だたる金剛として開発する、気概のある文言だった。事実、この頃、内地の国立公園法施行に刺激されて、金剛山を国立公園にする運動まで行われていた。

観光・リゾート地「CHOSEN」とは

このように見ていくと、幾つかのことが分かる。

一つは、当時、一部の外国人は、朝鮮半島を観光・リゾートの対象とみなしていたこと。そして宣教師の外人村のような外国人自らによる開発と、鉄道局のような他者としての外国人来訪を想定した開発があったことである。さまざまな動機から、朝鮮半島を観光・リゾート地「CHOSEN」と認識し、訪れる人々がいた。

さらに、朝鮮の鉄道には観光経路としての役割も見出された。それゆえ、開発主体になったのは、鉄道事業者が多かった。京城などの都市住民向けのリゾート地開発、温泉開発も盛んで、興味深いのはその幾つかは、宣教師達

のつくった避暑地のすぐ隣に、鉄道事業者がリゾートを開いたことである。宣教師達に先見の明があったということか。それとも外国人から避暑の仕方も学ぼうとしたということか。

鉄道事業者が観光開発に取り組んだ理由は、なにか。朝鮮半島の鉄道は、経営的に見て、軍需、貨物、旅客、全ての収益が不調という構造的な問題を抱えていた。この中でも、とりわけ、旅客需要は、内地、台湾、満鉄などの日本関連の鉄道事業者の中でも、著しく低い値だった。それゆえに鉄道の旅客収入を増すことが即効性の高い対策として捉えられて、外国譲りのリゾート地開発の入り込む余地があったのではないか。

観光地・リゾート地は、迎え入れる側のホストが、魅力ある空間を整備し、ゲストに空間体験を提供する。こうした行為が、朝鮮半島、日本内地、満州、中国と、時の差をわずかにして、ポータレスにあったことは興味深い。そこには、ゲストが東アジア各地を「物色」していくことで、各地のホストの開発意識を刺激し、リゾート文化の広がりを加速していた構図が見えてくる。20世紀初頭の東アジアの地理空間には、彼らの「非属地的」なリゾートを欲する空気がうずまいていたのである。朝鮮半島も、例外ではなかったのだ。



鉄道局が建設した貸別荘で避暑を楽しむ一家

PROFILE

すなもと ふみひこ



豊橋技術科学大学大学院修士課程修了。東京大学にて博士（工学）。2007年8～9月、成均館大学校で訪韓フェローとして研究。専門は都市・建築史で、近代期東アジアの国際リゾート地開発の研究をしている。

日韓文化交流基金事業報告

2008年度訪日・訪韓フェローシップ採用決定

2008年度訪日・訪韓研究支援（フェローシップ）の採用者が決定しました。訪日45名、訪韓5名の応募があり、このうち訪日は18名、訪韓は4名が採用されました。

訪日

가나다順

No	氏名	所属	職位	研究テーマ	受入機関	開始日 終了日
1	具智賢	延世大学校国語国文学科 BK事業団	研究員	18世紀の通信使を通じた日韓文士の交流の変遷 —筆談唱酬集を資料として	慶應義塾大学 文学部	2008.10.1
						2009.8.31
2	金美晶	成均館大学校 国語国文学科	博士課程修了	韓国近代文学と二重言語の層位たち —植民地における普遍言語主義、日本語/エスペラント/朝鮮語	東京大学大学院総合文化研究科 超域文化科学専攻表象文化論	2008.10.1
						2009.8.31
3	金政權	立命館大学文学部	客員研究員	佐久間象山の「東洋道德、西洋芸術」論の比較思想的考察	立命館大学大学院 文学研究科	2008.7.1
						2008.9.30
4	金鍾萬	国立扶余博物館	学芸研究室長 (学芸研究官)	日本出土百済系土器研究	岡山理科大学総合情報学部 生物地球システム学科人類学教室	2008.4.1
						2008.12.31
5	金珠賢	ソウル大学校社会科学大学 社会学科社会発展研究所/ 早稲田大学現代韓国研究所	客員研究員	日本における高齢者の生活世界と 生産的高齢化論議の関係に関する研究	早稲田大学大学院 社会科学研究科	2008.4.1
						2008.9.30
6	魯相豪	プリンストン大学大学院	大学院生 (博士課程)	日本帝国の都市計画と植民地中産階級の政治動員 —京城を中心に	京都大学 人文科学研究所	2008.10.1
						2009.8.31
7	宣在源	平澤大学校日本学科	助教授	1970年代石油危機期における雇用調整と労使関係の変化 —佐世保重工業の事例を中心に	東京大学大学院 経済学研究科	2008.6.23
						2008.8.22
8	申忠均	全北大学校人文大学 日語日文学科	副教授	アストン本『隣語大方』の基礎的研究	九州大学大学院 人文科学研究院	2008.4.1
						2009.2.28
9	吳允禎	南カリフォルニア大学 美術史学科	大学院生 (博士課程)	日本の百貨店が近代的「美術」概念の認識に与えた影響	東京大学大学院 人文社会系研究科 文化資源学研究室	2008.10.1
						2009.8.31
10	元智妍	全南大学校 文化社会科学大学 国際学部日本学専攻	副教授	植民地体験と内務官僚	一橋大学大学院 社会学研究科	2008.8.1
						2009.6.30
11	李明貴	淑明女子大学校意思疎通 センター（教養学部）	助教授	日本の明治期におけるミッションスクール	筑波大学大学院 人間総合科学研究科	2008.6.30
						2008.8.8
12	李錫遠	コーネル大学歴史学科	授業助教	汎アジア帝国の形成—戦時期日本の社会科学における空間、 民族、共同体：1931—1945	東京外国語大学 外国語学部	2008.5.31
						2009.1.31
13	張龍俊	国立金海博物館	学芸研究士	環日本海（東海）地域における 後期旧石器文化形成過程の比較研究	東京大学大学院 人文社会系研究科 考古学研究室	2008.11.1
						2009.9.30
14	鄭惇元	高麗大学校 人文大学北韓学科/ 北韓学研究所	講師/研究員	北朝鮮経済法制構築と日朝経済協力	慶應義塾大学 法学部政治学科	2008.4.1
						2009.2.28
15	鄭容郁	ソウル大学校 人文大学国史学科	副教授	「在日朝鮮人」のマッカーサーへの手紙から見る米国の日本占領 —「占領」の重層性と韓日比較	東京大学大学院 人文社会系研究科 韓国朝鮮文化研究専攻	2008.12.1
						2009.2.28
16	鄭昶源	大阪芸術大学大学院 芸術研究科	文化学研究員	東アジア近代建築の形成過程における 西洋人建築家の役割と影響に関する研究	大阪芸術大学大学院 芸術研究科	2008.4.1
						2009.2.28
17	趙燾熙	釜山大学校人文大学 日語日文学科	日本研究所長 ・副教授	日本語史の音声資料としての朝鮮資料のハングル音注について —キリシタン資料・中国資料との比較を中心に	東京外国語大学 留学生日本語教育 センター	2008.9.1
						2009.7.31
18	曹晟源	高麗大学校経商大学 経済学科	教授	第二次世界大戦後の韓国経済の再建と日韓関係	早稲田大学大学院 アジア太平洋研究科	2008.9.1
						2009.2.29

No	氏名	所属	職位	研究テーマ	受入機関	開始日 終了日
1	河先俊子	フェリス女学院大学 留学センター	講師	朴正熙政権下における日本語教育の実態調査 —日本語教育関係者の語りを中心として	同徳女子大学校 人文科学大学	2008.7.20
						2008.9.20
2	高 一	一橋大学大学院 法学研究科	講師（ジュニアフェロー）	1970年代中葉における北朝鮮の外交政策と東北アジア国際関係	ソウル大学校 国際問題研究所	2008.4.1
						2009.2.28
3	平井一臣	鹿児島大学法文学部	教授	日韓ナショナリズムと自治体間関係	釜山大学校 社会科学大学	2008.8.1
						2008.8.31
4	平郡達哉	釜山大学校 人文考古学系	博士課程修了	墓制からみた韓半島南部地域無文土器時代社会の展開と特質	釜山大学校博物館	2008.9.1
						2009.7.31

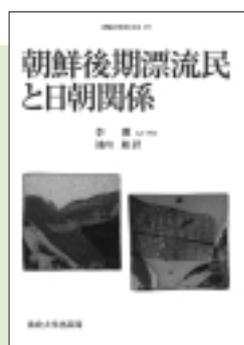
*所属機関・職位は申請時点のものを掲載

日韓歴史共同研究委員会

2007年11月24日（土）に、ソウル・ホテルロッテで日韓歴史共同研究委員会（第2期）の第2回全体会議を開催しました。まず分科会会議を行い、分科会ごとに個別の研究主題などについて話し合ったあと、全体会議でこれまでの分科会の研究進捗状況を報告し、全体で主題や研究成果の形式に関する意見調整を行いました。

「韓国の学術と文化」シリーズ新刊

韓国図書翻訳出版事業により、「韓国の学術と文化」シリーズの以下の図書が法政大学出版局より刊行されました。



『朝鮮後期漂流民と日朝関係』
(李薰著、池内敏訳)

『韓国外交政策の理想と現実』
(李昊宰著、長澤裕子訳)

『朝鮮朝宮中風俗の研究』
(金用淑著、大谷森繁監訳)

『韓国家族制度の研究』
(金斗憲著、李英美、金貞任、金香男訳)

学術定期刊行物助成



『現代韓国朝鮮研究 第7号』
(現代韓国朝鮮学会編、新書館)

報告書

以下の報告書が完成しました。これらの報告書は基金図書センターにおいて閲覧が可能です。

- 訪日学術研究者論文集 第十四巻（2005年8月～2007年3月）
- 訪韓学術研究者論文集 第八巻（2006年4月～2007年2月）
- 日本大学生訪韓研修団＜外交通商部招聘＞（2007年10月30日～11月8日）報告書

訪日団

団体名	団長	計	男	女	期間	訪問校
釜山青年訪日研修団	金玄淑 東亜大学校音楽学部 教授	29	8	21	1/8-1/17	立教大学、島根県立大学
済州青年訪日研修団	李相哲 済州大学校社会学科 教授	29	9	20	1/8-1/17	東洋大学、大阪市立大学 関東国際高等学校、 京都学園中学高等学校
ソウル青年訪日研修団	<文化行事入賞者グループ> 李鎮夙 韓日文化交流会議 事務局員	12	4	8	1/22-1/31	東京学芸大学、松山東雲女子大学
	<日本語教師グループ>	6	1	5		国際交流基金日本語国際センター、 埼玉県立南稜高等学校
	<高校生グループ> 姜徳元 国立国楽高等学校 校長	12	1	11		都立狛江高等学校、 和歌山県立大成高校美里分校



ホストファミリーの歓迎を受ける済州青年訪日研修団



江戸切子の製作体験をするソウル青年訪日研修団

訪韓団

団体名	団長	計	男	女	期間	訪問校
日本大学生訪韓研修団 (第1団)	大畑裕嗣 明治大学文学部 教授	20	6	14	3/4-3/13	慶熙大学校、忠南大学校

日韓ボーイスカウト交流事業

(財)ボーイスカウト日本連盟へ委託している「日韓ボーイスカウト交流事業」が行われました。今年度は韓国ボーイスカウト153名(スカウト132名、指導者21名)が、1月12日(土)から21日(月)までの9泊10日の日程で訪れました。

日本滞在中は日韓スカウトフォーラムのほか、長野でのウィンタースポーツ体験、京都市内見学や関西地区でのホームステイなどを通じて交流を深めました。



雪の降るなか、金閣寺を見学するスカウト

維持会員

2007年12月1日～2008年2月29日の期間に、5名の方に維持会員制度にご加入いただき、5万円の会費収入となりました。皆さまのご厚意に深く感謝申し上げます(五十音順、敬称略)

個人会員 5名

浅野豊美

菅野修一

小林陽太郎

尹明憲

和田とも美